内村鑑三先生

写真帳

II

1914 ~ 1927

柏木今井館聖書講堂集會

1914年(大正三年)頃と推定

〔内村鑑三先生五十四歳〕

宮部金吾

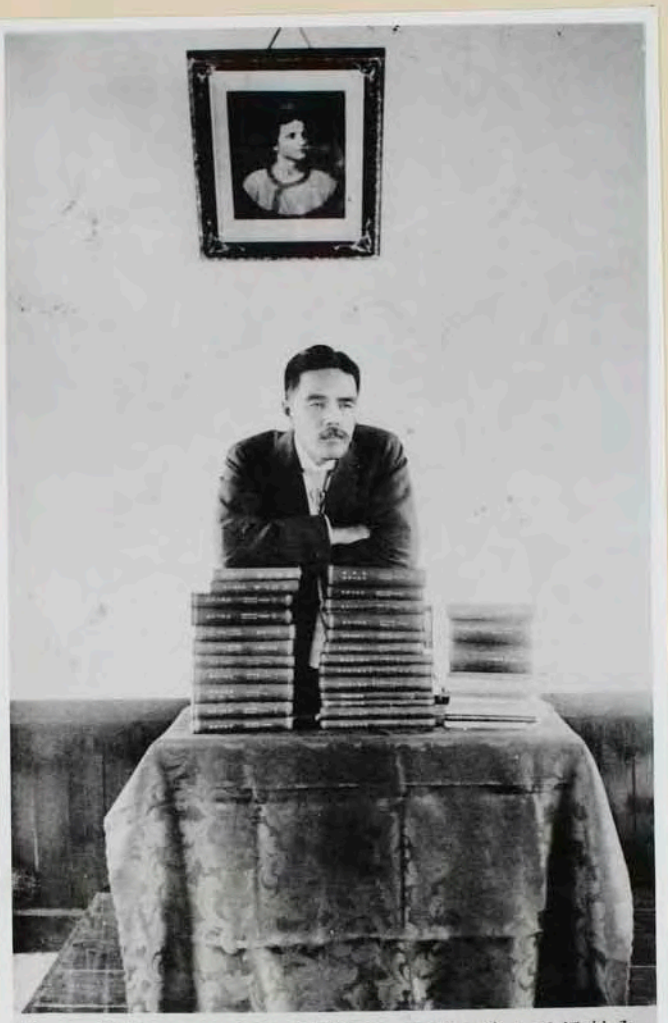
内村鑑三先生

8 森田甫

7 坂田祐

3 石川

2 柴田鐐次



Kanzo Uchimura and his Writings. 作著の彼と三鑑村内

講壇の壇上に於て
半身を己が著書に支る内村鑑三

1915年（大正四年）十一月二十一日

聖書之研究讀者會（於兵庫縣明石海浜）

當日の祝福豊かなる集會の模様は一讀者の詠ぜる左の詩句にもうかがはるる

午前

清翠松濤徙碧空　白沙嚴地美国中
深蒼講演心悠悠　恋慕會衆遊聖宮

午後

衆心隨聖落是時流　攻國紛爭未識休
天下狀形如鹽水　耶蘇獨出救人舟

夜會

夕陽沒浪播州洋　圓月懸松夜氣清
俗塵相逢談現世　信徒三十仰天郷

1916年（大正五年）四月二日
千葉東金に於ける聖書研究講者會出席者.

今関實　今関三郎　飯高潔　畑田伊勢治
作田貞雄　唐笠儉　細田新藏　澤野鐵郎
花澤正二　古川恭輔　高井傳市　坂田祐
柴田豐造　赤谷治三郎　石川誠治　海保俊郎
金関進　杉岡壽比古　根本藤次郎　柴田鶴治
成島忠周　岩佐春治　森田甫　牧野友藏
海保隆治　子安大助　齋藤宗吉　内村先生
椎名理一　板倉與市　海保竹松　藤井武
秋葉篤郎　高山安吉　中西忠吉　石川鐵雄
土屋禎　小高章三　畔上むつ
富助一　寺尾俊平　田中謙治　海保いく
畔上賢造　橋本くま

1916年(大正五年十一月

内村鑑三先生御夫妻

京都に於て撮影

(五十六才 四十三才)

1916年(大正五年)十一月

京都に於て撮影(五十六歳)

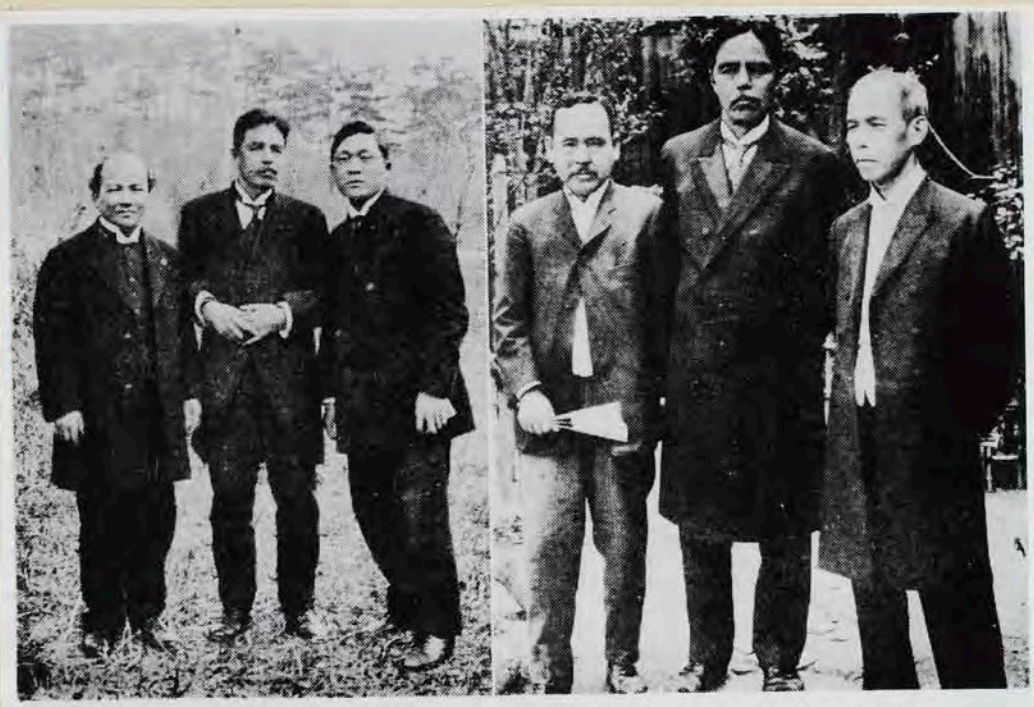
1916年(大正五年)十一月十二日

京都に於ける内村先生の聖書講演會

出席者寫眞

1916年(大正五年)十一月
京都に於ける内村静子

1917年（大正六年）十月（岡山家母堂永眠の年と推定
（内村先生ご夫人44）
京都に於ける寫真



再臨運動時代の先生

基督再臨の福音闡明時代の
内村先生等

1918年(大正七年)二月
於大阪

中田重治　内村鑑三　木村清松

1918年(大正七年)五月
於京都

松岡國男　内村鑑三　青木庄蔵

1917年(大正六年)八月十八日
御殿場東山荘に於ける園樂會の日の附近散歩、

内村先生と 日向都城教会牧師園部氏

1917年（大正六年）東山荘信会の日
近郊を独り散歩する
内村鑑三先生
（五十七歳）

大正六年八月中旬熱海櫻木山莊ニ於ケル

1917年（大正六年）八月十八日

東山莊に於ける園樂會

内村鑑三先生
（五十七歳）

江原万里 □

仲田信蔵 □

池田福司 □ 内村先生 □

□ □

□ 青木義雄

□ □ 蒲池信

坂田祐 ↑

□ □ 内村祐之

□

大正六年八月中旬御殿場東山荘ニ於ケル記念

1917年（大正六年）八月十八日

東山荘に於ける園樂會

内村鑑三先生
（五十七歳）

江原万里　□

□　神田信蔵

池田福司　内村先生

□　□

□　□

青木義雄

□　□　蒲池信

↑

坂田祐

□　□

□　内村祐之

札幌郊外豐平川畔の内村先生　（七月五日）

1918年（大正七年）六月廿六日東京發七月[illegible]日 帰京

第三回札幌傳道後久しぶりの札幌伝道で第四回目である。今回は令息祐之と京都の便利堂中村彌左衛門随伴、遂に旭川、北見野、牛登別、大沼公園を訪問せらるることとなつた。

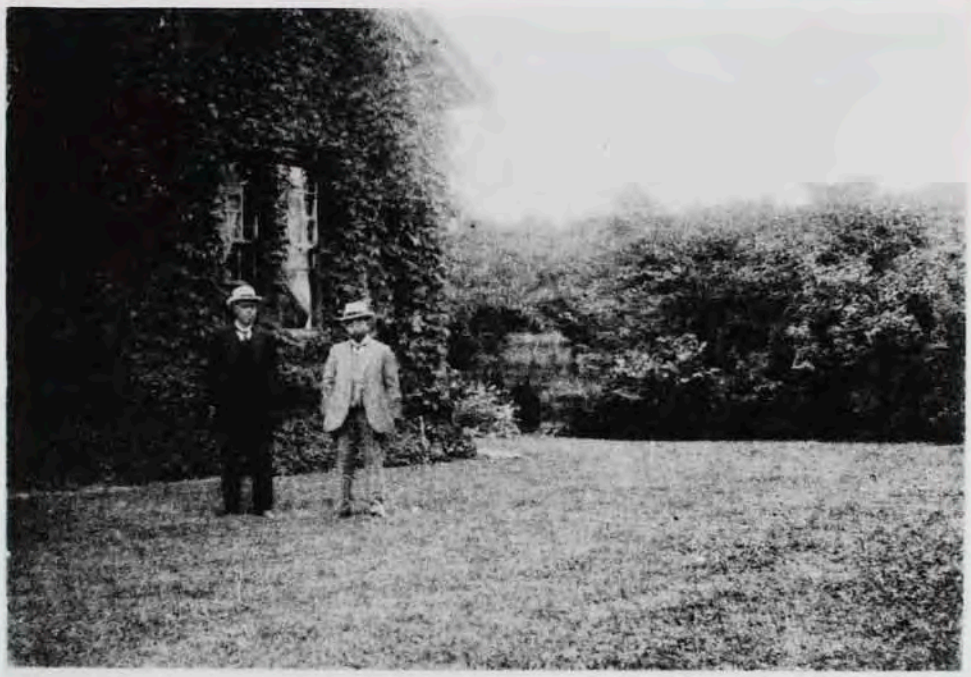
札幌帯
狩、豐平
昔之歩し親
年前の農
代を感慨

在中の或る時
河畔を
しく回ず
学校時
深く偲ばる。

1918年(大正七年)六月
内村鑑三先生は熱き祈禱の下に準備を整え、特い壇上より聖書の眞理を講ぜんとするに先だちての撮影(五十八歳)

坊ン櫻の園後氏部宮

1918年(大正七年)七月宮部邸滞泊中、
内村先生が新鮮なる櫻桃を枝
上より手ずから摘み採りて試食賞
味せらるゝは実に稀らしき事實である。
自然と人生との美わしき調和の光景
を観ぜられる。

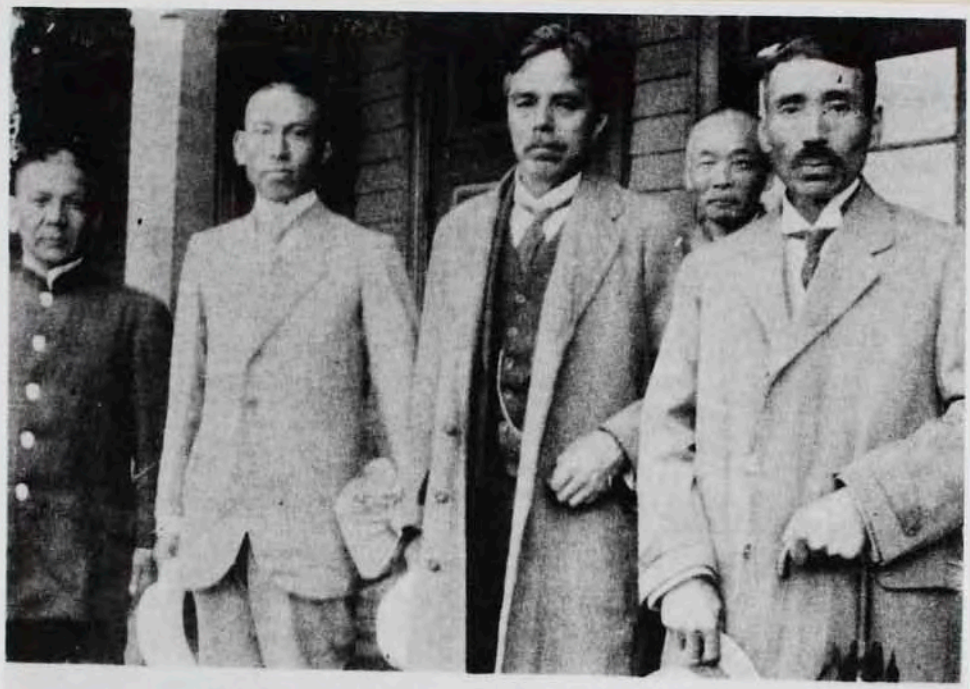


宮部博士と内村先生

内村鑑三先生と宮部金吾先生

其関係たるや深く強し。多年不變、純新緊密、之を「竹馬の友」、「刎頸の交」と称するも及ばず、眞に比倫と絶色したる恩寵の摂理に基因するものと信ずる外はない。

『参考』 兩先生の懐旧快談を伺りて倦怠すれば高音哄笑四辺を圧するので所謂"横隔膜以下の笑い"とは是れならんと感ぜられた。
(明治三十五年九月六日 第二回札幌伺通り同伴と称されし家が宮部家に一泊せし時の事。齋藤生)



旭川教友　七月九日朝

1918年（大正七年）七月九日
旭川停車場前にて

北見教友の一團

1918年（大正七年）七月十四日

北見教友の一団
石原氏宅にて撮影
（右より二番目祐之氏）

となる。
内村先生一行三人は一夜此家に客
ソン氏夫妻居住伝道す。
留付牛（北見市）には山豆教師ピア

ピアソン氏宅にて　鐵三
夜半の祈　屋外は忠て家郷の平康を祈る
北斗七星無し北見の空　夜半獨

登別行の列車　世界最大の瀑車

1918年（大正七年）七月十六日　登別行列車

登別温泉　其二　大地獄を覗く

登別温泉ニ泊中に大地獄を下瞰

駒ヶ嶽の麓　大沼公園　其一

1918年(大正七年)七月十九日午前
大沼公園より駒ヶ嶽遠望の先生と令息

1918年（大正七年）七月廿二日

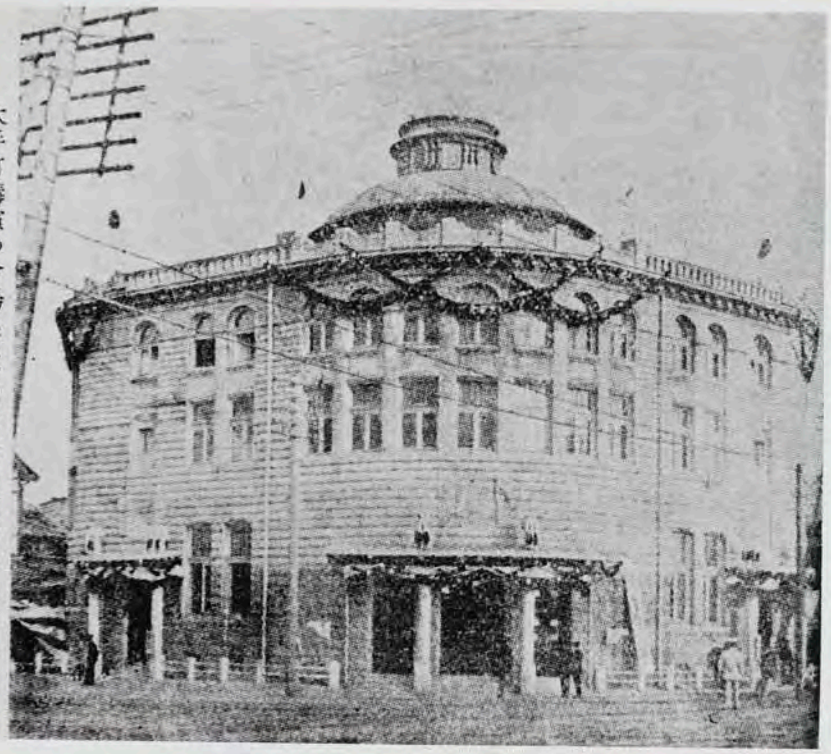
内村先生は一ヶ月近き長期に亘る北海道伝道を果されたる後のことであるから感謝滿足の凱旋たるは勿論のことであるが、心身の御疲勞の程も察するに餘りあることである。此際帰京の途中郷かの氣がね遠慮もなき静かな所に休養の時間を供するは肝要のこと、考え、私共は敬愛の心を籠めて、先生が平素主の愛を以て同情し居らる池田政代盲老婦の開業し居る禁酒主義の旅館（北沢駅前）に御一泊を乞い、夕の祈禱会、食事、入浴、按摩等私共の出来得る限りの優遇を以て先生を喜ばしてあげた。寫真は翌日旅館の前庭に於て撮影せられし。

池田新代	池田政代
菊池色	内村先生
鷲頭多新	照井眞吉乳
齋藤悠	齋藤宗次郎
小田代九之	
池田貞子	
池田房一	
斎藤忠吉	

1918年(大正七年)十月十一日

岡山縣會議事堂ニ於ケル聖書講演會

岡山医学校
神田先人
松平郷一
三谷隆正
矢内留忠雄
森本慶三
神田繁太郎
本間俊平
木村孝三郎
中田重治
内村鑑三
上野二郎
青木庄蔵
松田鶴之



大手町講演の會場（東京丸の内大手町所在、大日本私立衛生會）

大日本私立衛生會（東京丸の内大手町）

内村鑑三先生が聖書講演會場を神田美土代町基督教青年會館より當衛生會館に移せしは一千九百十九年（大正八年）六月一日の日曜集會（七名出席）よりで（大正十二年）震災焼失前まで四ヶ年餘継続した。
先生の畢生の偉業たる羅馬書講演は此期間中のことであつた。
此大講演は吉野貞周氏の好意により大正十三年九月に「羅馬書の研究」と題して世に公表することになつた。

1920年（大正九年）四月十四

兵庫縣西宮に於ける聖書講演會

内村先生六十歳

1920年（大正九年）七月廿三日

箱根強羅に於て長尾半平氏主催に成る

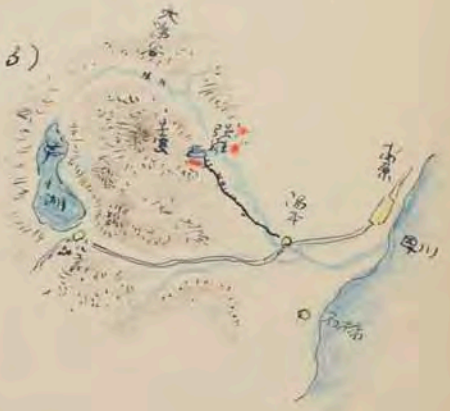
平信徒修養會を開く

講師 内村鑑三（黒色の上着にて中央に立てる）
渡辺善太
森戸辰男（長尾代りた）

主催 長尾半平（例て内村先生の右

會員百十餘名

為說 木山熊太郎



會後会員自由に芦湖大涌谷方面に散策す。

1920年(大正九年)頃
日本橋三越百貨店撮影
当時に於て係員刀禰穂吉氏の
請いに應じて撮影せられし
内村鑑三先生夫妻。
先生の背後は刀禰氏。

1921年(大正十年)五月一日
千葉縣山武郡鳴濱村海保竹松
氏が令息の結婚式を内村鑑三先生に
よつて擧行せられし時 裏庭にての記念撮影。

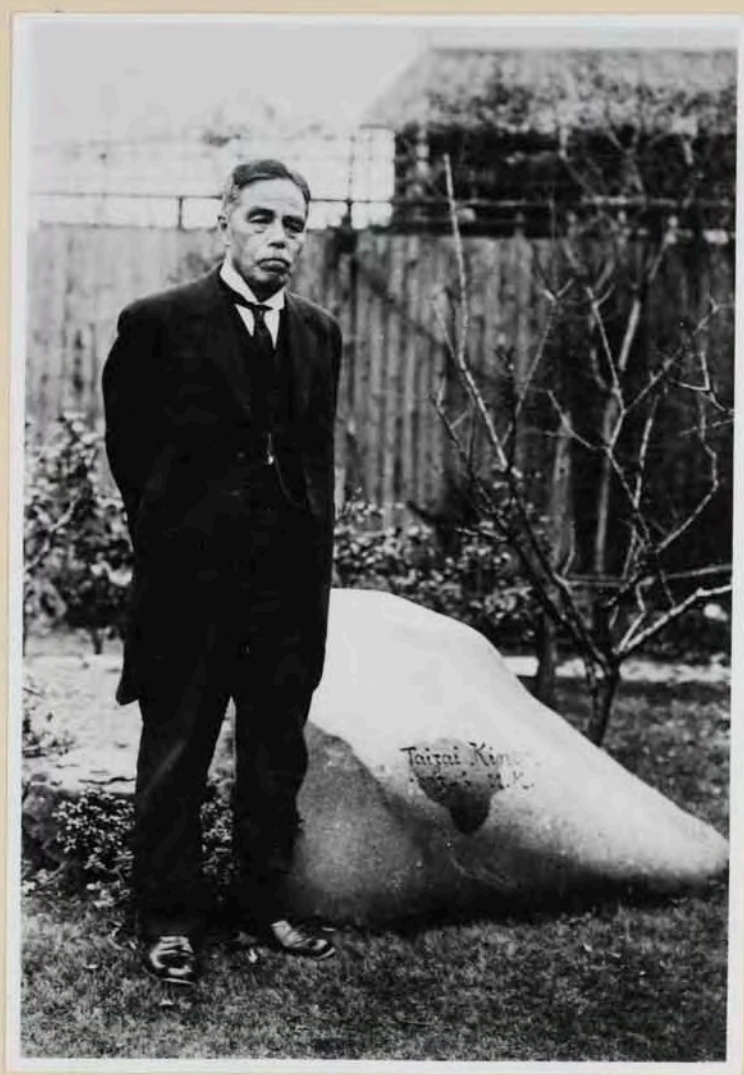
1922年（大正十一年）三月十一日
結婚に際し恩恵を受けた人々が内村
恩師の還暦の祝日に謝意祝意を表
せんとして各自子供を伴い集った時の寫眞

蒲池春江夫人
田中龍夫
田中梅子夫人
藤本ふじえ夫人
塚本虎二
内村静子夫人
内村鑑三先生
山村まりゑ夫人
（内村祐之）
（同明先校）
藤本武平二
蒲池信

遺族子供の名九十

内村鑑三

（撮影年月日不明）



1922年（大正十一年）六月下旬
京都便利堂（新町通り竹屋町下ル）に客たりし時
（52才）

（自1893年（明治廿六年）秋
至1896年（明治廿九年）夏）
京都上京区下立売通り小川西入居住
（饑餓との苦闘時代）
33才～36

1922年(大正十一年)八月廿六・七日 信州諏訪湖畔の
『聖書之研究』讀者會

八月廿六日(土)
午後二時 讀者會
馬可傳六章三二節の大意 内村先生
林義雄の秘訣は イエスを信じ 従う事 之なり
夜、感謝祈禮會 二千名

天文言部 山本一清
齋藤宗次郎
牧師 木村清松
小山英助(主催者)
内村鑑三先生
静子夫人 伊藤せい子
医師夫人

八月廿七日(日)
禮拜講演會 五千餘名
馬可傳十三章廿五節 内村先生
基督教が世界を征服せし原理
午後感謝祈禮會(齋藤司会)

1923年（大正十二年）三月
（六十三歳）

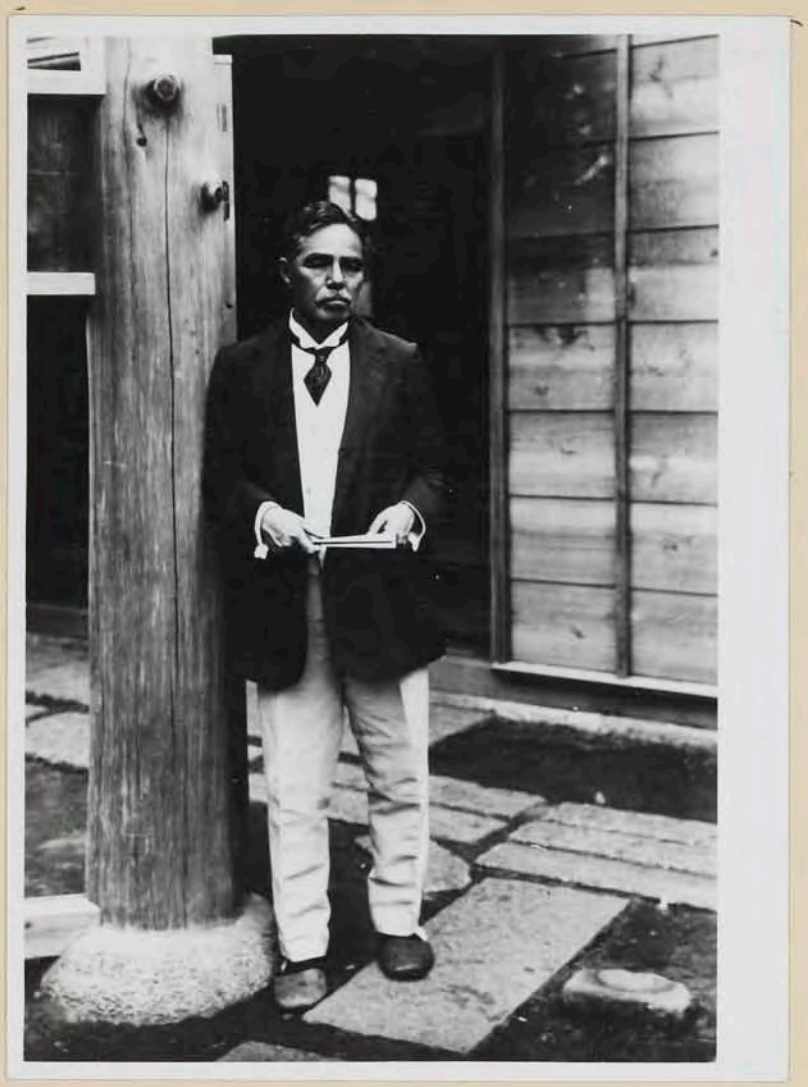
1923年（大正十二年）七月
軽井澤、林中に於て簡易生
活を送りし頃の内村鑑三（63才）

1924年（大正十三年）頃（推定）

柏木聖書研究會

1924年(大正十三年)五月頃
内村鑑三(七十四才)

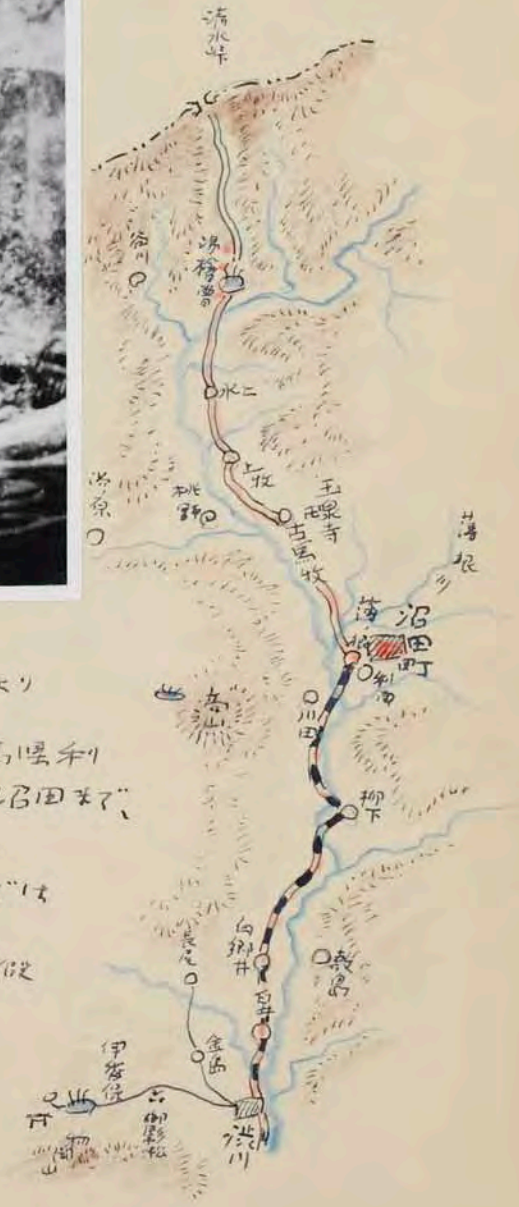
1924年（大正十三年）五月頃の
内村鑑三（六十四歳）
長野県小諸市懐古園蔵



1924年(大正十三年)夏
講堂の門側に立てる
内村先生(六十四才)

註、門柱は依然移動
上松の桜堤続改部氏
の寄贈せる木曽檜

同前



1924年（大正十三年）八月十八日（月）先生の日記より

少しく山に親しんとて、或る若き友に伴はれて群馬縣利根郡清水越の麓湯檜曾を指して出發した。渋川より沼田まで、利根川の兩岸を縫うて汽車の走る所は峡谷であつた。沼田より目的地までの乘合自動車は決して快いものではなかつた。

湯檜曾は明治廿一年、余が新潟なる舊北越学館從教頭として招かれて赴任する當時一泊した所である。今は昔の跡なく、只豊富なる温泉の湧る所に湧出するのみである。山は深く、風は涼しく、遠路を居して來る甲斐のある所である。

1925年（大正十四年）六月六日（土）午后二時
於市内青山會館
若手下男女学生聯合禮拜會を開く
來會者三千五百名と称せらる

内村鑑三先生は東京神学社校長高倉徳太郎先生と壇を共にし「日本國と基督教」と題し講演された。
隨分骨が折れたが若い人等の大衆に向つて語ることとて氣持が好かつた。多分東京に斯んな大衆が共にキリストの聖名を讃美した事はあるまいと先生は言われた。

1925年（大正十四年）七月十二・三日

聖書之研究第三百號記念感謝會

感謝會

七月十二日（日）午後三時より講堂に於て開かる、遠近より來る者二百名以上（山梨、新潟、兵庫、栃木、茨城、千葉、長野）、初めての讀者は二十名以上あつた。

讃美歌、聖書朗讀、祈禱の後内村先生は「頌榮の辭」を題し研究誌に加へし神の恩惠の數々を列擧され次に大嶋先生の述懷、來會者數名感話があつた。六時一先ず閉會

有志懇話會

七時より開かれ、感話文々續き、研究誌に由て死せし人々の美わしき實狀談に接しては一同嚴肅の感に打たれた。九時愛惜の間に閉會

慰勞晩餐會

翌十三日内村先生に對する慰勞の爲に塚本、畔上両先生並に教友有志の發起より晩餐會は上野精養軒に於て盛大に開かれた、上図はそれである。

1925年（大正十四年）六月二十五日、二十六日

一夜を東北本線の汽車中に過し廿五日正午函館着直ちに湯の川迎賓時任邸に至った。一同の大歓迎を受けた。午后五時當家次男幸次郎と三浦浩子の結婚式を司った。出席者五十名を越えず、名家の結婚式としては至って質素なるものであった大に我意に叶い非常に嬉しかった。約翰傳二章カナの結婚式に於て主が水を變えて葡萄酒となし給いし其意義に就て語った、即ち普通の物を化して甘き意味あるものと成し給うと。

時任家は德川幕府時代からの名家であり、之に福音入り、子女十一人盡く信仰を以て成長せしを思い、北海道に關係深き自分としてはその為に祝福を祈らざる能はずと思い今回態々遠路此地に來った次第である。

翌廿六日は函館に於ける樂しき一日であった。朝新郎新婦と共に自動車を馬車時任家經營の上磯牧場に行いた。景色を眺めて後茅屋に憩い入を許さん雲霞を聞きつつ午餐を食った。五時遺愛女学校の夕の礼拝に臨み一場の講話をなして帰った。夜十一時一同に送られて帰途に就いた。波静かなる船中の目覚め安かった。

内村先生の日記より抜粋

1925年（大正十四年）六月二十七日（土）

齋藤忠兵衛　芳野良八　池田竹代　照井眞臣乳　内村鑑三先生　齋藤宗次郎　齋藤仁志　小原澄義

六月二十七日午前六時十五分青森を發し七時間の暑き汽車旅行にて陸中花巻に着き、その地の教友の大歡迎を受けた。明治四十四年以來の初ての花巻訪問である。土地の變化と發展に驚いた。然しそれより寧ろ驚いたのは舊き教友の信仰の變らない事であつた。我等は舊城内の齋藤宗次郎の苺畑に於て細かなる感謝祈禱會を開いた。（次面につづく）

1925年(大正十四年)六月二十七日(土)

多年の宿望を果されし内村鑑三先生

(つづき)終つて畑より直に摘取りし赤い甘い大粒の苺の豊かなる饗應に與つた。花巻に止まりし三日半間は一刻千金であつた。午后五時發の汽車にて帰途に就いた。三人は水澤まで、一人は一關まで送つて呉れた。それより急行列車に乗換え再び客車を旅館として安き眠に就いた。一日を花巻に費し非常に嬉しかつた。

来て見れば暑いながらの花巻や
苺摘き苺に友の真心

(先生の日記より)

函館 青森 盛岡 花巻 仙台 宮城 高崎 東京

1925年（大正十四年）七月六十五才

○ 神の豫定に給いし時満ちて内村鑑三は日本國に生る。直ちに聖靈の導きに從いて苦難試煉の荒野に長い間身軀心靈の鍛煉に過ごし、進んで聖書全篇の啓示に浴してキリストの福音の眞髓に徹し、順次之を世に公表して六十五齡に達した。茲に身長を越ゆる浩瀚の己が著書を積み重ねてその側に立ち、全幅を一貫せる十字架の眞義を仰ぎて感謝讃歎に堪えざる先生の嚴かなる姿容を熟視して、余り亦その祝意歡喜の一端を分與せらるゝ好感を懷かしめらる。

先生の愛顧に終始あずかりし　本帖編集者
野人　齋藤二郎
八十七歳

1927年(昭和二年)九月廿六日 札幌市ユーゴー亭にて撮影

札幌内村會

1011年(大正八年)五月十七日 内村鑑三は 翁が恩奬学金を母校なる札幌農学校に献金。
之に基いて逐年奬学金を受けし者八人其内一人死亡現在札幌に住する者六人、孰れも農学部卒業又は在学の優等生である。自分の提供せし少額の奬学金を受けて共れた事は此上なき名誉であつた。
一同先ず撮影し次いで夕食を共にし卓上談話に快楽を貪つた。茲に「札幌内村会」を設くることに議決した。将来会勉結合して活動せんことを約した。

顧問 宮部金吾 特別会員 内村鑑三
普通会員 今田清二、田沢十吉、小野寺敏、小山一郎、沢田英吉、島倉事次郎、石塚喜明
照井禮吉生、
此上後会員に加わりしは 鈴木依一、柳田雪正、本間春一、矢島武、長沢勝、田口孝元、伊藤信夫、
関藤元一、谷口正太郎、下村博治、伊藤正夫、柳山二郎、常田光雄、坂井弘 以上
以上 昭和二十年 調査 以降中止に成る。